

## 竜樹における空の体系化

——『中論』第二十四章を中心として——

真 田 康 道

### (1)

竜樹の不朽の功績は、般若經典類に語られている空の思想を哲学的に体系化したことであるといわれる。そのことは、竜樹の比較的初期の著作と考えられる『根本中論頌』 *Mūlamadhyamakakārikā* に如何なく發揮されている。しかし、彼が空の思想を体系化、組織化したとはいえ、その論理は帰敬偏の冒頭から「不生亦不滅、不常亦不斷、不一亦不異、不來亦不出」の詩句ではじまり全二十七章にわたって貫かれている徹底した否定の論理であり、破遮の論理である。すなわち、竜樹自らの論理を構成しないことが、かれ自身の論理であり、自己の証得した仏陀の眞精神を宣揚する武器でもある。

一切の見を出離することが空であると、諸の勝者によって説かれた。

これに反して、空見を抱くものは、これ不治者であるといわれた。〈13・8〉

と、このように「一切の見を出離すること」すなわち、一切の「心理的執着と概念的固定性」<sup>①</sup>を遮遣したところに

空は顯現するが、しかし、この空と名づけられる境界も一つの対象として概念的に捉えようとすれば、それもまた一つの見となつて、その人は救い難き者となるという。したがつて、空ということもまた空せられねばならない。このように一切を否定し、破遮したところに竜樹の徹底した態度がうかがわれる。そして、その徹底した否定、破遮こそが、かれの最大の武器でもあった。また、かれのこの精神は、後世の中觀論者たちにもずっと受け継がれていった。すなわち、プラーサングガ派の月称が「われわれには自らの立宗はな<sup>⑧</sup>く、「敵者の立宗を遮遣することのみ効果がある」と帰謬論証法をもつて、自らの立場を主張する拠り所としたのも、このことを意味するものである。もっともかれのこの発言は、同じ中觀派の流れをくむスパータントリカ派の清弁の学説に対して向けられたものであるが、しかし、かれとても新因明の論理を自立論証法として積極的に採用したのも、かれの自立論証的論理の行使が「勝義に遭ひ、勝義の絶対否定を経た論理<sup>④</sup>」であるからであつて、相対否定 *pariyudāsa-pratiśedha* に対する絶対否定 *prasajya-pratiśedha* を強調することによつても、竜樹のこの精神を継承しようとした意図がうかがわれる。

このことは、ともかくとして、竜樹が否定の理論に徹底した理由は、一つには、竜樹の置かれていた時代的な情勢（外部的原因）と、他の一つは、空そのものの本質性に基づく原因によるからである。すなわち、時代的な情勢とは、正理 *Nyāya*、勝論 *Vaiśeṣika*、数論 *Sāṃkhya* などのバラモン系哲学派やアビダルマが有力であり、これらは共通して實在論的世界觀を説き、分析的論理を構成していたから、この實在論を破遮することであり、さらに、空それ自身も否定に徹しきつたときこそ、その本質性が顯現するからである。ところでわれわれの世界はすべて概念的経験の世界である。そして、この概念的経験なくしては、何一つ理解することはできないであろう。たとえば、「これは猫である」とか、「これは瓶である」という立言も、以前に猫、瓶などについての何らかの体験な

くしては不可能である。まだこれらに關しての經驗を持たない人にとっては「これは何もかである」としかいいないからである。<sup>⑥</sup>そしてこの經驗の積み重ねによって、日常生活や社会の軌範・慣習が成立する。したがって、經驗なくしては、日常生活や社会の営みも成り立たない。しかし、概念的經驗の世界は、すべてを有と無、一と他などの二次元的、平面的世界へと固定化する。換言すれば、われわれの世界は、概念化された世界に他ならない。そして、この概念化された世界の上に、日常世間の言説乃至すべての論理や学説の行使——それらは、竜樹の立場からいえば、戲論に外ならないが——がある。しかし、概念化の世界を現出せしめる主体は、業と煩惱を有する主体人間に外ならない。そして、さらに一層根源的には、業と煩惱を有する人間を形成せしめてあるのは、無始時來人間が存在する限りあり続けるところの無明に由来する。かくのごとくであれば、実に無明こそが、人間とこの世界を現出せしめる根源であることになる。世俗はかかる構造を有する。しかし、世俗は固定化された平面的な世界であるが故に、対立の世界であり、また、永劫に生死流轉する世界でもある。それらを総じていえば、世俗は、根源的に無明によって覆障された世界である。

それ故に竜樹はいう。

業と煩惱の滅尽より解脱がある。業と煩惱とは思惟分別から起る。

それらは戲論より起る。しかるに戲論は空の理解において滅する。〈18・5〉

と。業と煩惱の滅尽することから解脱があるが、それが実現可能なのは、業・煩惱↓思惟分別↓戲論の順序としてある人間生存のありかたにおいて、解脱するためには、まず最初に戲論が空性によって滅せられねばならない。ここにおいて、戲論↓思惟分別↓業・煩惱の滅尽という順序で解脱が得られる。ところで、「しかし、戲論は空性において滅せられる。」*prapañcas tu śūnyatāyaṁ nirvīyate* とは、戲論の行使される有と無、一と他などの対立の

世界から不生不滅、不一不異の世界への超克である。その時とき、始めて寂靜な涅槃の成就がある。それ故に、空はわれわれの概念作用の在する次元とは、絶対的に隔絶する。

他に縁ることなく、寂靜で、戲論によって戲論されず、

思惟分別を離れ、無意義である。これがすなわち実相の特徴である。〈18・9〉

このように、実相（＝空性）は世俗の思惟分離と戲論を超絶する。したがって、そこにおいては、有と無の二辺を越え、言亡盧絶し、一切が靜寂である。このような世俗の論理を超絶する空性の宣揚が、実に竜樹に果された使命であった。絶対的眞理＝空性を前にしては、世俗の如何なる論理も哲学も、さらに日常世間の言説もすべて砂上の樓閣の如く無力なものとなってしまう。この帰謬の論理は、とくに「觀去來品」第二章に詳しく述べられているが、ともかく、有と無の相対的次元を隔絶した空性の世界には、世俗の論理は一切通用しない。すべての概念作用は否定され、概念作用によって構成された論理は遮遣されなければならない。

それ故に、

空義によって論破がなされるとき、これを否定するものがあったも、

それはすべて否定されないので、否定は皆論破されたものと所立と同じになる。〈14・8〉

また、きみが如何なる非難を空に關してなすにしても、

われわれに過去は起り來ることなく、その非難は空において適合しない。〈24・13〉

と、すべての論理を破遮することにより、有・無の相対的次元を超出するのであり、そこにおいては、もはや世俗の論理によって反駁することは通用しない。しかし、一切を否定することは、虚無に陥りやすい。

もしこの一切が空であるならば、起もなく、また滅もない。

四聖諦の非有が、きみの説に附随してくる。〈24・1〉

あるいは『廻諍論』の第一偈では、

(中観者の言うように) もしどこにも、いかなるものにも本体(自性)というものが無いとすれば、君(中観者)のことはも本体をもたないが、それでは本体を否定することもできない。<sup>⑦</sup>

空は無存在、虚無であり、したがって一切の事物は、それ自らの効用性もなくなつてニヒリズムに陥るのではないかとの、空に対する論議が他学派よりなされるのである。竜樹は、空を虚無と解して論難を投げかけることに対する弁明にかなりの努力を傾注したことが、かれの著書よりうかがえる。それでは、空と虚無とは如何に相違するのか。空は世俗の一切を否定し、一切の論理、概念を遮遣することにおいては、確かに一種のニヒリズムである。しかし、空はただ虚無にとどまるのではなく、それを超克して絶対性へと止揚されねばならない。空への止揚は、絶対的否定に徹することにおいてのみ可能である。勝義においては、世俗の論理はすべて破遮される。その破遮は、絶対的否定へと徹底される故に、ニヒリズムを超克する。けれども、ニヒリズムを超克して絶対性に帰入するといつても、世俗を遮遣することのみに終つては、それもまた一種のニヒリズムであるといわざるを得ないであろう。われわれにとって、真理がただ隔絶性として存するのであれば、実践のともなわない観念論にすぎない。むしろ世俗がそのまま空なる側面がそこになければならない。空は世俗を確に超絶しているが、また同時に、空は世俗を離れていない。それ故に空は、隔絶性の論理というよりも、むしろ即の論理である。空は、世俗と勝義の相即するところに顕現し、そしてその相即を可能ならしめるのが縁起である。だからこそ、竜樹は「縁起なるものはすべて空である」〈24・18a〉と説明する。竜樹の意図する縁起は、もちろんアビダルマの因果律の論理ではない。

「第一章」において、アビダルマの因果律を破遮することによって、あらゆる存在が無自性なることを挙示し、そ

こに再び相対性の論理として縁起を復活せしめる。

この様に、空は即の論理に立脚する故に、ただ超越した境界としてのみ捉えるべきではなく、全体的、統一的に把握されねばならない。空の一つの「全体的世界観」である。ここに再び仏教の根本原理としての、苦・集・滅・道なる方軌に基づいて論理の展開がなされることになる。しかし、竜樹の時代的使命は、世俗の一切の成り立ち方の予質を指摘し、それを遮遣し、否定して空性を顯示することにあった。すなわち、論理の超越の側面の力説にあった。それ故に、アビダルマの如き分析的肯定的な論理の展開はなされなかった。しかし、空は世俗を離れて成り立たず、世俗と勝義の相即することにおいて、始めて空は本来的な真の意味を顯わすのであれば、空はむしろ世俗のあらゆるあり方の軌範の論理を包摂するところの全体的な世界観である。このようであれば、ここに再び空の体系化がどうしても必要になる。しかし「空の体系化」ということは、容易に片付けられない重大な問題を含んでいる。中観派と唯識派の論争も、また中観内部のプラーサンギカ派とスバータントリカ派の論争も、実にこの問題を巡っての長い歴史の展開であったといえるだろう。ともかく、竜樹の空の論理は、破遮と否定の論理で貫かれているが、一方で空を体系的、統一的な世界として捉えたのも事実であり、まさに『中論』二十四章がこの空の体系を展開する部分であるといえるだろう。このことを論究するに先だって、二十四章の構成について述べることにする。

## (2)

二十四章の題名が「聖諦の討究」 *Āryasatya-parikṣa* となっていることからわかるとおり、四聖諦についての論述である。本頌は四十偈であるが、それを一読すれば判る通り、その内容に関して明らかに第六偈までと、第七偈以降とに、区分することができる。すなわち、第一偈〜六偈までが、空に対する有自性論者の論難で始まり、

第七偈～四十偈までが、竜樹のこれに対する論破である。このことは『廻諍論』が初めの二十偈が正理学派の中観学派（竜樹）への論難であって、同じ論の構成をなしている。山口益博士の言葉を借りるならば、前分所破と後分能破の形式である。そして博士は「廻諍論は廻諍論独自の論の役目を果しつつ、そこに根本中論の観四諦品における竜樹中観の重要な諸点を取的し、それを顕了ならしめている」と指摘されている通り、両者の間には、共通の姿勢がうかがえる。

前分所破とは、アビダルマ、とくに説一切有部の所説の引用であって、『中論』諸注釈の内、とくに月称は、*prasannapada* で有部の学説を詳しく分析している。その内容は、「もしこの一切が空であるならば、起もなく滅もなく、四聖諦の非有がきみの説に附随する」（第一偈）と、有自性論者が空を虚無に解して、空は生起も消滅もない全く非存在なものであれば、そのことによって順次四聖諦の非有（第一偈）智 *parijñā*、断 *prahāṇa*、証 *sakṣiki-karman*、道 *bhavaṇā* の非有（第二偈）、預流・一來・不還・阿羅漢の四向四果の非有（第四、五偈）さらに因果と法と非法乃至世間の一切の日常生活の言説習慣を破る結果になる（第六偈）と論難する。これに対する第七偈以降の後分能破は、さらに三つの部分に区分できる。すなわち、(i) 第七偈～第九偈、(ii) 第二十偈～第三十九偈、(iii) 第四十偈の三つである。(i) は、有部の空に関する論難に対する竜樹の空の見解の表明である。具体的に言えば、第一偈前半に対する反論である。(ii) は、第一偈後半から第七偈までの論破であり、(iii) は、結論の部分で、「この縁起を見るその人は、すべてすなわち苦と集と滅と道を見るのである」と、(i) に表明した空義に基づいてこそ、四聖諦は可能であると述べる。これらの区分を図式化すれば次の如くである。

- (一) 前分所破
- (i) 第一偈 a
  - (ii) 第一偈 b～第六偈

(一) 後分能破

- (i) 第七偈〜第一九偈  
(ii) 第二〇偈〜三九偈  
(iii) 第四〇偈

さらに前分所破の部分の対応する偈を挙げるならば以下の如くである。

△前分所破▽

△後分能破▽

(一) 第一偈 a

第七偈〜第一九偈

(i) 第一偈 b

第二〇偈〜第二六偈

(ii) 第二偈

第二七偈

(iii) 第三偈

第二八偈

(二)

(iv) 第四偈

第二九偈

(v) 第五偈

第三〇偈〜第三三偈

(vi) 第六偈

第三四偈〜第三九偈

この内、この拙論で最も重要なのは、後分能破の(i)第七〜一九偈の、竜樹が眞実空の立場を表明する部分である。この部分こそ、『中論』二十七章の内、他の章と異なった独自性が認められるからである。さらにこの第七〜第一九偈の詩句の内容を『中論』の諸註釈を参照して区分わけすれば、以下の如き四つの部分に大ざっぱに区分できると考へる。

- ① 第七偈 空用 'śūnyatā-prajñāna'、空性 'śūnyatā'、空義 'śūnyatārtha'、の空の三つの特質の説明



② 第八偈く第一〇偈 世俗諦 saṃvṛiti-satya と勝義諦 paramārthasatya の二諦の説示。

③ 第一一偈く第一三偈 誤って捉えられた場合の空の有害性と空は世俗の論理を超絶していることを説く。

④ 第一四偈く二〇偈 空と縁起の関係を説示。

ここで注目しなければならないのは、

(1) 空用・空性・空義の空に関する三つの特質。

(2) 世俗諦と勝義諦の二諦。

(3) 縁起・空性・仮説・中道の関係。

の空に関する三つの説明である。以下この点について論究する。

### (3)

前節の(1)で説明したように、竜樹は一切の論理を遮遣することによって、空の本質性を拏示しようとした。しかし、空は虚無であるとの論難に対して、それを弁明するためには、どうしても空の全体的な体系化が必要であり、そうした全体的世界観に基づいて展開されなければならない。この空の全体的体系化とその説明の部分がまさに『中論』第二十四章であるといえるだろう。では、空の体系とは何か。それは前節に掲げた、①空用、空性・空義、②世俗諦と勝義諦、③縁起とそれから派生してくる空性、仮設、中道の差別相の三つの空の側面である。これらの語句は、いづれもすぐれた解説や研究がなされているので、いまさら論述する必要もないが、「空の体系化」という、この拙論のテーマに即してその必要な範囲において述べてみたい。

竜樹は空を虚無と解する有自性論者に対して、その弁明はまず、第七偈で空用、空性・空義の空に関する三つの

特質をもって開始されることは、注目すべきであらう。この空の三つの特質について月称の註釈に基づいて述べれば、以下の如くである。まず、空性 *sunyata* には第十八章第九偈をもってこれに相当せしめて説明する。<sup>⑩</sup>それは「他を縁として知るのでなく、寂靜で戲論によって戲論されず、無分別で無異義である」(18・9の部分)としか言いようのない世俗の有無の二辺を超絶した態である。すなわち言亡慮絶の態で一切の言説は許されない。しかるに、かれはまた、同じ第九偈をもって勝義の説明に当てていることからわかる通り、この場合における空性は勝義と同一意味と解される。それ故に、かれが勝義の説明部分で「諸聖人の勝義は默然たり *tusṇimbhava*」であり、<sup>⑪</sup>「(勝義は) 諸聖人の自内証せられるべきこと *pratyātmaavedya*」と述べていることからわかるように、空性もまた、ただ聖人によって主体的に証得される態であるといえるだろう。これに対して空用は、かれの説明によれば、同じ第十八章第五偈をこれに当てて説明する。

空用とは何であるか。それはまさしく「法の討究」(第十八章)において述べられている。

業と煩惱の滅尽から解脱がある。業と煩惱は分別から生じる。

それらは戲論による。しかし、戲論は空性において滅せられる。(18・5)

このことから、一切の戲論を残りなく滅するために空性が説かれる。それ故に、一切の戲論を残りなく滅することとが、空性における実用である。<sup>⑫</sup>

空用は、「一切の戲論を残りなく滅せしめること」であり、空性がただ言亡慮絶の態にとどまるだけでなく、凡夫の戲論を寂滅せしめ、遂に涅槃を証得せしめる作用あることをいう。空義については、月称は、「空性という語に基づいて生じてくる意味を、それをまた実ここににおいてわれわれは認めるだろう」<sup>⑬</sup> ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵

縁起という語の意味は、まさに空性という語の意味である。これに対して、非存在という語の意味は、空性という語の意味ではない。そして、きみは非存在という語の意味を空性という語に誤って断定して、われわれを非難する」<sup>⑮</sup>

空義とは、空性の縁起性あることをいう。すなわち、空性は世俗と断絶して勝義と同一味でありながらも、しかも世俗と離れてはありえず、常に世俗に即してある。世俗の一切も無自性であるが故に、一切が縁起するところにそこにそのまま即して空性は顕現し、空用を全うする。換言すれば、空義とは、空性が縁起性の故に、即の論理を意味する。

ところで、清弁は、この空の三つの特質をどのように理解しているだろうか。かれは、次の様に説明している。

空用とは、実に戲論寂滅の相である。 *sarvaprapañopasānasya lakṣaṇaḥ*. 空性とは、実にすべての執着を離れた相である空性を認識する智である *śūnyatām upalabdhes jñānaḥ*. 空義とは、真如の相である *tathāgatatāya lakṣaṇaḥ*.<sup>⑯</sup>

かれによれば、空用は「一切の戲論寂滅の相」であり、空性は言亡慮絶の態である空性を認識する智<sup>⑰</sup>であり、さらに、空義は「真如の相」である。ここに清弁と月称の空性の三つの特質に対する微妙な解釈の相違がうかがえる。その原因は、清弁と月称の二諦の解釈の仕方の相違に基づくという。すなわち、月称は、空性を言亡慮絶の態であって、それは聖人たちの「黙」であり、「自内証されるもの」としてのみ可能であって、かれは主体的、行証的な立場で理解するのに対して、清弁は、(聖人たちの)「智」(*nirvikalpa* 無分別智)の立場で理解している。また、空用を月称は、空義に基づいて涅槃に到らしめる効用性と理解して、世俗から勝義に到る超越の面に力点を置いたのに対して、清弁は、空用を月称のいう世俗を超越するための効用性と理解するとともに、異門勝義と実世

俗において、空用と空義が戲論寂滅の相、真如の相として、それぞれ働きかけのあることをも説こうとしたと推定される。二人の空の特質についての解釈が微妙に相違するが、ともかく空用によって、世俗↓勝義、生死界↓涅槃へと、凡夫の解脱の教えとして、そこに観念論が打破されて空の実利性が述べられる。そして空義によって、実体論と虚無論が打破され、世俗と勝義の相即が述べられるのである。かくして空用・空性・空義の説示によってこそ空の真実の意味が発揮されるのである。

けれども空用・空性・空義が開示されるのは、二諦と縁起の理論に基づいてこそ始めて可能となる。ところで、世俗と勝義とは本来全く次元を異にする世界観であるが、それにもかかわらず両者が常に対句として述べられるのは、本来「世俗↓勝義」「勝義↓世俗」という往相と還相の問題をその根本的課題としているからである。しかも、世俗と勝義の間には、絶対的断絶が存在する。そして絶対的否定を通して世俗は勝義に転換しえるのであるが、世俗と勝義の相即が成立する理論的根拠は、縁起に求められる。竜樹の意図するところの縁起は、もちろん因果律のそれではなく、一切の存在が相対的あり方においてのみ成立することによって、一切のそれらが無自性としてあることに帰せしめられる。一切が無自性であることは、外界の存在が無自性であるにとどまらず、内的世界の一切も無自性としてあるのである。したがって、一切の概念的な想定も論理もその根拠を失って遮遣される。ここに戲論の寂滅があり、世俗より勝義への超克がある。このように相対的縁起が、一切の存在を無自性に帰せしめることによって、自ずから絶対否定の成就があり、世俗↓勝義、勝義↓世俗への二諦の相即を可能にする。換言するば、世俗と勝義の二諦は、互いに全く相反する性格——有に對する無の關係でなく、世俗が有と無の次元ならば、勝義は有と無とを超克した次元としての両者の性格——として、常に対立し、緊張關係にありながらも、両者の關係によって生じてくる往相と還相を可能ならしめ、二諦の相即を可能ならしめるのは、まさに縁起である。縁起と二諦が

このような関係においてあるとき、空用・空性・空義という空の真実の意味が顕現するのである。しかし、竜樹は、①空用・空性・空義、②二諦、③縁起という空の三つの側面を語ってはいるが、それらが具体的にどのように関係し合っているかについては述べていない。しかし竜樹が第十四偈で

空が適合するものには、一切が適合する。空が適合しないものには一切が適合しない。(24・7)

と述べるのは、空を三つの側面において体系的に理解しているから可能となるのである。すなわち、この意味を註釈によって理解すれば、青目釈では「空が適合するもの」を空義とし、「一切」を「一切世間出世間の法」と述べて、次の様に説明する。

以「有ニ空義」故。一切世間出世間。法皆悉成就。若無ニ空義。則皆不ニ成就<sup>⑮</sup>。

空が縁起性なるが故に、世間と出世間の一切法が成就されるという。月称と清弁の註釈にもとづくと、この「一切」とは、第一偈後半の四聖諦より、十六偈の法と非法と一切の言説の内容を指している。月称の註釈によって「空が適合するもの」という意味を理解すると、かれは次のように説明している。

なぜなら、一切の実体の自性にかの空性が適合される場合には、上述の如く(すなわち第一四偈の如く)かの一切が適合する。何故かといえば、われわれは、縁起の故に実に空性であると説く。<sup>⑮</sup>

また次の如く述べている。

一切法は空性である。無自性であるから。<sup>⑯</sup>

彼の場合も「空が適合するもの」とは空義であって、縁起・無自性・空が成立するとき、世俗と勝義と世俗より勝義に至る道・果の一切が成就することを語っている。このことから、この偈の意味は、空は縁起によって世俗と勝義の一切を成就せしめる。したがって、世俗と勝義の一切が成就するのは、空性に基づく。しかし、さらにその根

源に竜樹は、縁起と二諦の意味をしっかりと体系的に把握していたからであるといえるだろう。

このように、二諦と縁起が相互に関連し合うところに、空性・空用・空義という空の真実の意味が発揮されるが、また同時に、その二諦と縁起が成り立つところに、言説や方便としての因施設 *upadhyaya-prajñapti* と、世俗から勝義に至る道 *mārga* としての無分別なる中道 *madhyama-pratipad* の二つの概念が空性と縁起の同義語として、あらたに説かれることになる。その説示が第一八偈に外ならず、それ故に月称は第一八偈の註釈部分の結論として次の如く述べる。

それ故に有と無の二辺を遠離するから、一切の自性によって生じない特徴が空性であり、（それがまさしく）中道であって、中の道（諦） *madhyama-mārga* といわれる。<sup>②</sup> このように、空性と因施設と中道といわれることが、それが実に縁起の差別相 *viśeṣa-samjñā* である。

竜樹は、一切の世俗の論理を遮遣し、否定の論理を力説しながらも、空を空用・空性・空義、二諦、縁起の三つの側面から体系的に把握しようとしたことがうかがわれる。そしてその説示が、第二十四章第七偈、第十九偈の部分であるといえる。

# 註

① 山崎次彦「竜樹における見 (*dr̥ṣṭi*) の把握とその超克」〔結城教授記念論集〕所収。一八八頁参照。

② 山口益『中論釈』I。三三頁。

③ 同 三三頁。

④ 梶山雄一「中観哲学の論理一序」〔哲学研究〕第四〇二号所収）三〇頁。

⑤ 同 「中観哲学の論理形態」〔哲学研究〕第四一五号所収）二八頁。

⑥ 新たに定義づけることができるのではないかと考えられるが、これとても定義づけするまでのある程度の経験を経なければ不可能である。

- ⑦ 梶山雄一訳「廻靜論」一三五頁。『大乘仏典』一四一竜樹論集―所収。
- ⑧ 山口益「廻靜論について」三六一頁。○山口益仏教学文集』下、所収。
- ⑨ 同 三三四頁。
- ⑩ Bibliotheca Buddhica. IV. p. 491 II 4~7.
- ⑪ 山口益訳『中論釈』I、八一頁。
- ⑫ Bibliotheca Buddhica. IV. p. 493 II 10~11.
- ⑬ 同 p. 490 II 15~17.
- ⑭ 同 p. 491 II 7~8.
- ⑮ 同 p. 491 II 15~17.
- ⑯ 影印版西蔵大蔵經、九十五卷、二二六頁、四一二~三。
- ⑰ 梶山雄一「中觀哲學の論理―序」二五頁、註(1)。前掲戴書。
- 野沢靜証「中論觀四諦品第七偈に就ての清弁の解釈」(『印仏研』二卷一号所収)。
- ⑱ 大正、三十卷、三三上。
- ⑲ Bibliotheca Buddhica IV. p. 500 II 5~6.
- ⑳ 同 右 p. 500 II 11.
- ㉑ 同 右 p. 504 II 13~15.

